

助成事業実施報告書

2018年4月20日

団体名 青少年の自立を支える奈良の会

代表者名 理事長 友廣 信逸

1、助成プロジェクト名

青少年女子における性に関するチャレンジ事業

2、実施団体の概要

2009年、行き場のない若者たちの存在について心を痛めていた弁護士、元家庭裁判所調査官、大学教員、児童自立支援施設職員等の有志により、「奈良に自立援助ホームを作る会」を設立しました。2012年11月「青少年の自立を支える奈良の会」としてNPO団体として認証され、2013年4月「自立援助ホームあらんの家」を開設しました。

3、プロジェクトの目的とその背景

愛情飢餓の環境下で育った子どもたちは孤独から逃れるために早期に家庭を持つことを望む傾向にあるように感じます。しかし、実際に妊娠期間を経て出産を迎える間に、パートナーとの関係性も変わり、結局は家族間連鎖を招いてしまう結果となってしまうことも多々あるのが現実です。他人に惑わされることなく自分らしく生きるために自己肯定感を得ること、性感染症について知識をえること、妊娠・出産・育児に対する現実を理解し、実生活における経済的予測、またライフプラン、キャリアプランを立てられることが、結果として望まれない妊娠を予防することにつながるのではないかと考えました。当事者、一人一人に個別指導することは困難なので、学校教育の中で体験的に取り入れて頂く為にも、まずは学校現場の養護教諭や保健体育の先生を対象として、既にあちこちで活躍されている講師の実践的な活動を体験して頂きたいと思いました。

4、プロジェクトの内容

「生きること=性」と捉え、第1回目は助産師さんによる、人がこの世に命を与えられ成長していく過程、出産を実際に体験し、命の尊さを学ぶこと。第2回は、午前に現代の若者たちが安易な性行動の代償として受けるリスク性感染症について、午後は、昨今、少年院の中で増加しつつある「性加害者の若者」の心理と理解について、第3回は、実際に家庭を持ち子どもを授かり育む親となったときに、どの位お金が必要なのかを学ぶ。第4回は、主に障害を持つ若者たちの中で理解されにくい性の問題について捉え、支援者としての臨床心理的アプローチを学びました。

5、プロジェクトで得られた結果

参加者より、別紙のような感想をいただき、学校現場や施設の中で、この学びを積極的に活用していただけるとの回答を多く頂きました。当法人内の男子入所者が講演に参加し、性感染症について考えるようになったと感想がありました。また、出生時の平均的な重さにこだわり、当法人が主体となって作成した赤ちゃん人形（16体）であるが、講演後、貸し出し希望が数件あり、県内高校、障害者施設、奈少年良刑務所等で何度も活用される運びとなりました。また、もっと早く学びたかったとの意見が多かった「生きる力を育むお金のはなし」については、講演の中で体験的に使用された給料袋や本物に似たおもちゃの1万円札や千円札を、実際に金銭管理教育として使用し、教育されたという障害施設の話もお聞きしました。

6、プロジェクトの実施にあたっての課題

開催にあたっては、奈良県内のすべての中学校、高校の養護教諭、児童自立支援施設、母子支援施設、特別支援学校全てにプロジェクトの案内を郵送したものの、性に関する関心が薄く、参加者が少なかったことが残念でした。また、当初、女子の援助ホーム設立を視野にいれ始めた事業でしたが、県内に他団体が女子ホームを設立された為、男子ホームを主に行っていた当法人で女子の電話相談事業を開始することができず残念でした。しかし、実際には男子のみならず、女子の相談も当法人によせられることが多く、運営歴の浅い他団体の女子ホームとの連携がうまくとれなかったことが、大きな課題となりました。自立の為の女子ホームだけでなく、あらゆる暴力から逃れる為の女子児童のシェルターの必要性が迫られている現実があり、連携を取りながら設置について各関係機関と検討を重ねていきたいと思っています。

7、参考資料（別添参照）

